

デジタルには無限の夢とロマンがある

富山 治夫

■銀塩写真の宿命

階調豊かなトーンの連続が美しいモノクロ写真。しかし、銀塩写真の場合、コストや環境問題などで、感光材料に含まれている銀の量が減ってしまい、昔のような階調豊かな再現のプリントが得られなくなりました。これは多くの写真家が悩んでいるところだと思ふ。バライタ紙で、昔ながらの仕上がりを望む場合、まだ銀量が多く使われて作られている海外の印画紙を取り寄せて使うしかないのが現状だ。印画紙はどうかなくても、フィルム自体も銀量が減っているのだから、こちらはいかんともしがたい。

そういう部分では、銀塩アナログ写真の宿命は明らかであるので、これからはデジタルでやるしかないと思ったわけである。デジタルはまだまだこれからだが、その分伸びる要素があるわけで、そこには無限の夢とロマンがあると思っている。まったく趣味でモノクロ写真をやるのであれば、印画紙などを海外から輸入してプリントすればよいが、なかなか自分の思った通りのサイズや号数が取り寄せできない。後は自分で感材を作るわけであるが、これまたむずかしい。つまり仕事ではなかなか対応しにくいのである。

■写真からフォトグラフィーへ

基本的な写真に対する考え方としてだが、日本だけが「写真」という言葉を使っている。そもそも、僕はこの「写真」という言葉自体に問題があると思っている。真実を写す、ドキュメンタリーを写すというのが、言葉どおり写真のあり方だったわけだが、いま、デジタルの時代になって本来の意味を考えて、フォトグラフィーに戻ったほうがよいのではと感じている。フォトグラフィーに戻せば世界中共通言語になる。日本の写真という言葉にはひずみがあってあいまいさを残しているのだと思ふ。

富山 治夫 (とみやま はるお)

今年で写真生活45年を迎える。1978年、ニューヨーク・I.C.P.、1999年、北京・中国美術館で開催した写真展は大好評。2003年秋に紫綬褒章を受ける。JPS会員
ライフワークの『現代語感』を朝日ジャーナル、カメラ毎日、月刊現代など、十数誌に38年間もの長期にわたり連載

■モノクロが原点

写真の原点は、モノクロである。これだけ世間には色彩があふれているなかで、なぜモノクロにこだわるかといえば、モノクロは無限のカラー写真だからだと思っている。モノクロ写真を見て、自分の頭の中でイメージとして色を無限に想像できるのだ。だからこそ私はモノクロにこだわっているのである。

キヤノンが5年ほど前に「写真は何を語るか」というキャンペーンをやり、僕の写真も広告に使われたのだが、写真というのは1つのメッセージだと思う。メッセージを誰に伝えるのか、もう1つは時代の証言。そう考えると、モノクロでない表現できないのである。たとえば川の水1つとっても、日本では青く透明でというイメージになるが、中国などでは砂の影響で黄色なわけである。そこにイメージの交差点があるのだ。モノクロだと写真には色がないが、そこに中国の川は黄砂であるという認識が加わることで色がイメージできるのである。もっとモノクロ写真の原点を追求すべきだと思う。

■デジタルでのモノクロプリント

僕はキヤノンサークルのモノクロ部門のコンテストの審査員をしているのだが、デジタルで応募してくる写真を見ると、ほとんどのプリントがシアンが強くて観賞に耐えないのである。1つはきちんとした指導を



写真A 基準プリント

写真工業



【現代語感より「過密」】

受けていないからだろうと思う。そのあたりの問題を考えてみたい。

僕のモノクロプリントの制作環境はというと、MacintoshのG4が2台にMAC OS9.2.2という環境で作業を行っている。そこに外付けのハードディスク160GBのものが10台。プリンターはエプソンのPX-9000、PX-G5000の2台、キヤノンがPX9000など3台である。プリンターによりモノクロ出力はぜんぶ違ってくる。PhotoshopはVer.6.5を使っているのだが、これは、最新版と違い、6.5のほうがオートマチックではないぶん、いろいろな処理が自分でよくわかるからである。画像もモニターで見ながらどう処理していくかがよく見えるのだ。従来の銀塩写真はハンドメイドであるので、デジタルになってもおなじように、処理があまり自動化されずにわかるほうが性に合っているようだ。自動化が進みすぎると、どこでも一律のものになってしまう面白くないと思う。やはり個性がだせる処理が望ましいと思う。

■簡単なインクジェットモノクロプリントの手順

簡単なモノクロプリント方法であるが、デジタルカメラで撮影した画像は、まずCMYKに変換して、画像を保存する。これを元データにしている。これを1度グレースケールに変換してからCMYKに戻し、ここでシアンを(5~15%)マイナスしてやる。これを1度プリントする。このプリントを見て、まだ色が浮いているようなら、CMYKデータに戻って、その色を抜いてやる。そして、再度プリントを行うのである。

モニターとの色合わせも、モノクロプリントを作るときには、規準となる写真を作り、そのときに使用するソフトやプリンター、ペーパーの組み合わせで出力してみる。規準となる写真は僕の場合は写真Aを使っているが、白から黒までグラデーションがよくでている写真を使うとよいだろう。その規準プリントに合わせて、微調整をかけていくのである。

あとは、右へならえて同じ調子のプリントが得られることになる。つまり、自分の好みとなる自分なりの基準プリントを作り、これをパソコンに置いておき、必要ときにいつでも、作りたいプリントと合わせてプリントしてみることである。そうすることで、どのくらい調子を整えるとよいかかわかると思う。

画像データサイズだが、60×40cmサイズのプリントを作るのに、横15,000ピクセルの画素数にするのを基準としている。このピクセル数だとモノクロならなんとかなるが、カラーだとデータが重すぎてしまう。つまりプリントしたい画像のデータは、マシンのもつ最大限の能力を使って作るようにしているのである。

今後の展開だが、モノクロをもっときれいに出力しようと思ったら、RIPを使うことだと思っている。これによりモノクロの階調などをいまよりずっと自由にコントロールできるはずなので、いま僕は、業務用のRIPの導入を検討中である。

(RIP: Raster Image Processor。ポストスクリプト(画像を点とそれを結ぶ曲線の集合で扱う)で記述されたデータを印刷や表示が可能なビットマップデータ(解像度に応じた画素の集合)に展開するハードウェア。ソフトでこれを実現するものはソフトウェアRIPと呼ぶ)